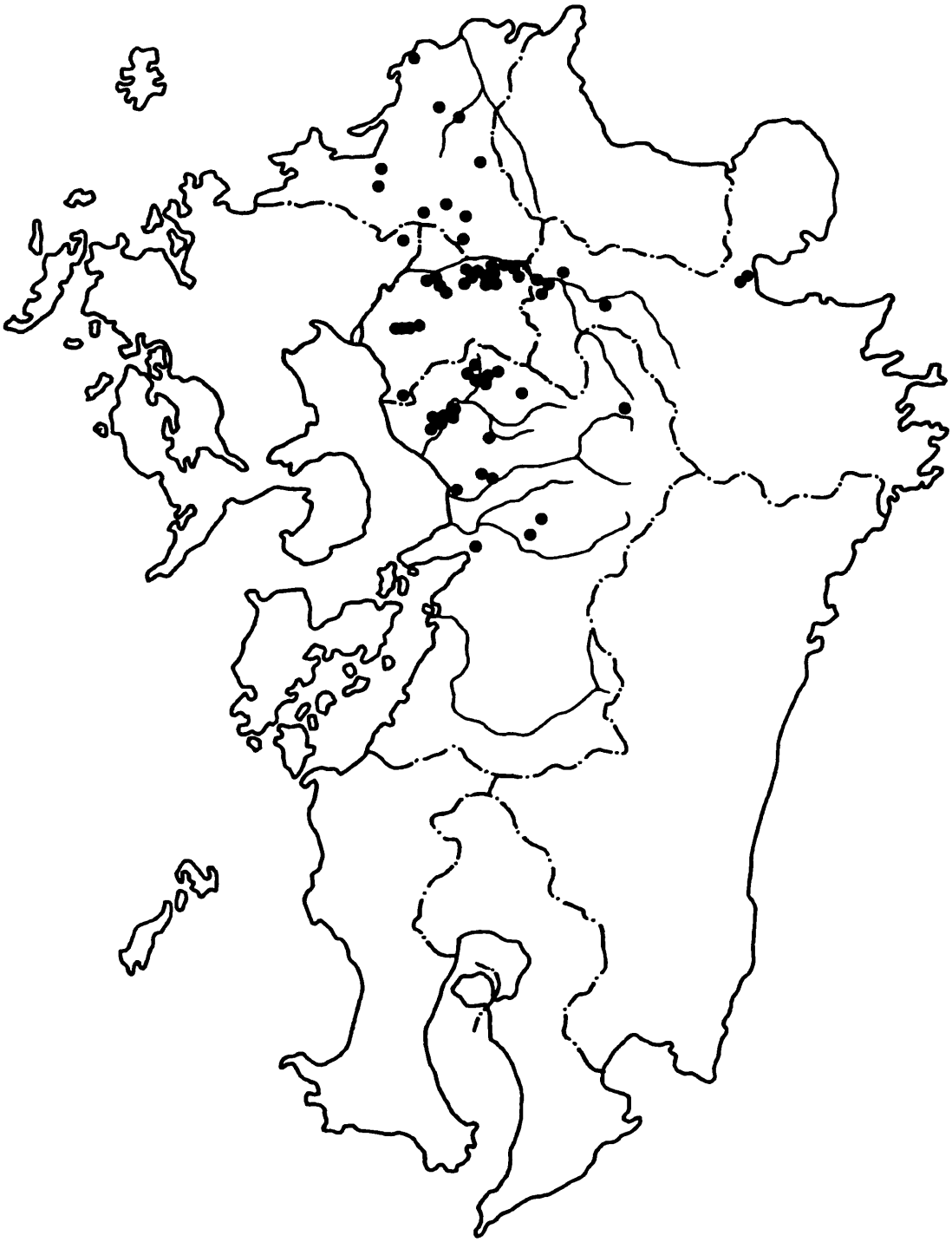
船に乗る馬

― 装飾絵画の一考察 ―

はじめに

5世紀から6世紀にかけてのころ、古墳内部に置かれた柩や石室内部に、浮彫、塗色、あるいは線刻によって各種の文様を描くことが流行した。これまでに知られたこれら装飾古墳の数は、全国で約600基に達している。そのうちの3割以上が熊本県内に分布し、横穴を除いて石室構造をなす古墳では、熊本県菊池川流域と福岡県筑後川流域が全国の装飾古墳発見例の約半数近くを占めている（第1図）。日田地域を含めた筑後川流域の彩色絵画の出現と展開に関しては、石屋形や石棚などの独特の石室構造をもつことから菊池川流域との関連が想定され（赤崎、1995）、装飾古墳研究においては熊本県北部地域が最も重要な位置を占めていることが既に指摘されている。しかしこれまでは装飾古墳の絵画のもつ特異性が強調され、それらに関する図録その他の出版が盛んに行われてきたにもかかわらず、菊池川流域における古墳文化変遷過程を視座に置いての、装飾古墳の成立と展開に関しての構造的な研究と分析は、ほとんどなされて来なかったと言っても過言ではない。

装飾古墳研究の出発点となる「分類」については、これまでに様々になされてきたが、石棺系装飾、石障系装飾、壁画系装飾、横穴系装飾に区分する小林行雄の分類が今日多く使用されている（小林、1964）。しかし石障系古墳の成立に関して、箱式石棺墓との関連を重要視する立場では、これに箱式石棺系を加えるのが妥当であるし、歴史的なつながりを重視する観点からは石棺系から石屋形系を分離するほうが有意味である[(1)]（乙益、1974、玉利、1987、高木、1994、蔵冨士、1997）。それぞれの装飾をもつ初現の古墳としては、横穴系は熊本県山鹿市付城横穴群（世紀第一四半期）、石障系は熊本県八代市長迫古墳や大鼠蔵尾張宮古墳（5世紀第一四半期）、石屋形系は熊本県玉名郡塚坊主古墳（5世紀第四四半期）、箱式石棺系では熊本県天草郡広浦古墳や八代市門前2号墳（4世紀第四四半期）などを挙げることができ、壁画系は山鹿市臼塚古墳（6世紀第一四半期）からはじまる。石棺系では福岡県八女郡石人山古墳が最も古く、5世紀の第二四半期に位置付けられるが、石棺に装飾を施す技法は小林が指摘するように（小林、1964）、大阪府柏原市安福寺の石棺など竪穴式石室に納められる例があり、前期古墳出土石棺との関連で解釈が可能ともなっている。しかし突如としてこの地域に出現したことの歴史的意義については、なお未解決の問題を多く孕んでいるといえよう。石人山古墳の直弧文を施した石棺以外、筑後地域においてはこの種の文様を刻んだ石棺が未発見であり、熊本県の有明海か不知火海の周辺部から持ち込まれた可能性も依然として残されており、菊池川中流域に所在する鹿本郡鹿央町の岩原古墳の内部主体に、石人山古墳の石棺と同様な装飾文が施されている可能性は少なくない。このように見て来ると、装飾古墳の形成にあたっては熊本県下に展開した古墳時代の動向が大きな鍵を握っていたことが窺えよう。



第１図　九州の彩色絵画古墳分布図

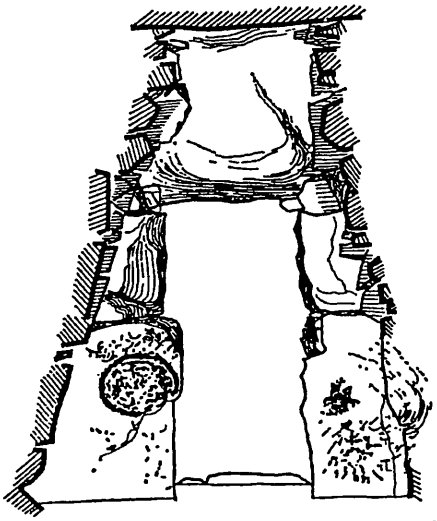
装飾古墳の研究史

装飾古墳に描かれた文様の中で、直弧文や靫、楯などの防具類は辟邪の思想を表したものであり、広浦古墳などの石棺に刻まれた文様は、死者に備えるための副葬品であったと推定される他には[(2)]（乙益、1974)、考古学の立場から装飾のもつ「意味」に関連してこれまでに積極的に言及されることはあまりなかった。こうしたなか松本信広は福岡県珍敷塚古墳や鳥船塚古墳で発見された装飾文様につき言及し、「天の鳥船」との関連を初めて示唆したのである（松本、1954)。日月の運行の担い手として、東南アジアでは船が、北アジアや中国では車が重要視され、鳥船塚古墳（第２図４）や珍敷塚古墳（第２図５）などに描かれた船を漕ぐ状況は、中国南部や東南アジア大陸部に広がる銅鼓の図像と一致することから、天の鳥船信仰は日本の古代文化の中に潜む南方系要素の１つとして松本は位置づけたのである。そしてこの船の働きは「死後の霊魂が太陽の方角にある黄泉の島に行くときの手段」と想定した。この松本論文はかつて米田庄太郎により、日本神話にみられる天鳥船は世界各地にみられる魂の運び手としての船と共通し、「霊魂の国が海または河の彼岸にあると信ぜられる処では、死人船の観念が生起する」とした論（米田、1917）を発展させたものである。

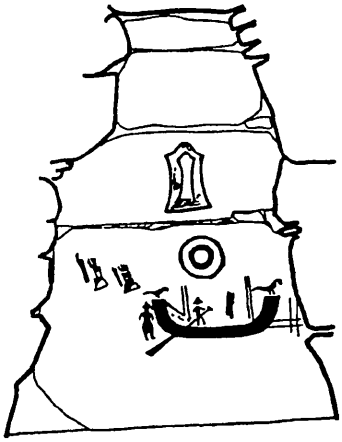
漢代においては天空を駆ける車は龍車と呼ばれていた。一方漢代もしくはそれ以前の長江流域では、昆崙への旅立ちには鳥と龍が重要な役割を果たしたのであり（曽布川、1981)、車は漢代になって龍と結びついたとするのが妥当である。中国の殷代においては、神や霊魂は白馬で訪れることが白川静により論じられており（白川、1970）古代中国においては魂の担い手として、北方地域の鳥または犬と馬、中・南部地域の鳥または船＝龍（龍船）との対比として基本的には択えることができる。

装飾絵画に関するもう１つの論攷は、福岡県竹原古墳を題材にして金関丈夫により展開されたものである（金関、1969)。金関説によると、竹原古墳の奥壁に描かれた絵画は一幅の意味ある全体像であり、翳の存在と船や波文などはそれが水辺での神聖な行為であることを示しているという（第２図１)。上方にやや不釣り合いに躍動的に描かれた動物は、尻尾や指先の特徴から龍を表示したものと解釈し、龍と馬との結びつきこそがこの壁画のライト・モチーフであると想定したのである。右側の翳と馬の間にみられる赤と黒で交互に描かれた三角文は、本来は五彩であり、それは『管子』に言う「龍の衣服」を表示することからも、この絵画の中では龍が大きな意味をもっていると推定した。従ってこの全体像が表す内容は、「駿馬を得るために龍の棲む特定の水辺に牝馬を率いて、龍媒を求める」とするものであり、漢学に造詣の深い金関のこの論証は考古学者からも高く評価されてきた（森、1964)。 しかしこの説に問題がないわけではない。まず日本の装飾古墳に描かれた絵画は葬送儀礼の一環として描かれたはずであるから、こうした絵画は第一義的には葬送儀礼に関する内容であったはずであり、次に具象的な絵画表現を示す事例は竹原古墳だけでなく、ほぼ同時期に近接して営まれたそのほかの類似した内容を表す古墳絵画に対しても、全体として統一的に解釈できることが求められるからである。したがってまず、葬送儀礼のイデオロギーでこれら装飾古墳の全体的解釈が可能か

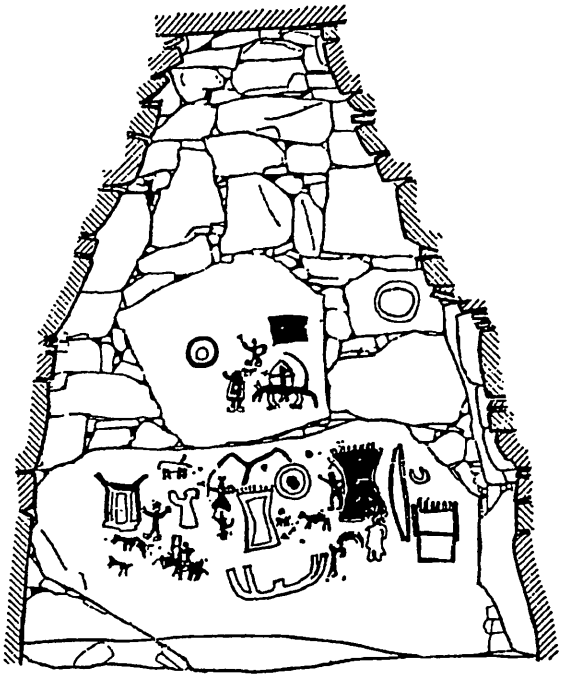
1



2



4



3

5

第２図　装飾壁画　１：竹原古墳奥壁、２：竹原古墳前室、３：五郎山古墳奥壁
４：鳥船塚古墳奥壁、５：珍敷塚古墳奥壁

否かを検討する必要が生じてくることになろう。

具象的装飾壁画

装飾古墳のうち具象的な表現をもつ例として福岡県五郎山古墳、竹原古墳、珍敷塚古墳、鳥船塚古墳を挙げることができる（装飾古墳に関する記述は以下の文献に拠る。小林、1964、斎藤、1973、佐賀県立博物館、1974、坪井・町田、1977、藤井・石山、1979、高木正文、1984、国立歴史民俗博物館、1993）。

五郎山古墳は福岡県筑紫野市原田に所在する直径約32mの円墳で、複室構造をなす横穴式石室墓の奥壁と左右の側壁奥側に具象的な絵画が描かれている（第２図３）。奥壁の腰石中央部に１雙の船が描かれ、その左側には騎馬人物２人とそれを先導する犬２頭が、その上方には霊屋（殯屋）に向かって祈る２人と、矢を番える装備をつけた人物像がある。また画像中央から右側には大きく描いた靫と弓、そしてそれら武器の間を縫うようにして、４人の人物と鳥、馬などが小さく描かれ、円文がちりばめられている。腰石上部の奥壁には円文に向かって踊る２人の人物と２匹の犬、騎上で矢を番える人物がみられる。また左側石には１雙の、右側石には２雙のそれぞれ棺と想定される箱を載せた船と円文が表現されている。楯、靫、弓、鞆などは死者の霊魂を保護するものであるとすれば、矢を番える人物は新しい魂を悪霊から護る役割が想定される。円文が黄泉の国を象徴する日月星辰であり、腰石に描かれた霊屋の前で祈る人物、腰石上方の奥壁に描かれた人物が歌踊音曲するしぐさとみると、そこに一貫した葬送儀礼が描かれているとの推定が可能である。腰石左側に描かれた騎馬の人物のうち手前側の人は黒色で区画された方形の中に赤い３点の円文を飾る「もの」を手にしている。これは従来楯であろうと想定されてきた。しかし装飾古墳の文様にみられる楯は上端がどれも「山なり」になる特徴を示していることから、別の「もの」を想定しなければならない。また腰石中央上段に緑色で屈折した「大」字形に描かれた図形は鳥の羽ばたく姿とされてきたが、鳥像は他の事例ではもっと鮮明に描かれていることから、衣笠を抽象化したものと見るのが妥当であろう。五郎山の装飾絵画では、楯や靫で示される伝統的な辟邪思想とともに、新しい葬送儀礼の思想が混在している状況とみることができよう。

竹原古墳は福岡県鞍手郡若宮町の諏訪神社境内にある、複室をもつ30mほどの前方後円墳で、奥室の壁画を描いた上方には、菊地川流域に起源をもつ大きな石棚を構えている。前室の左右の奥壁に玄武と朱雀が描かれ（第２図２）、奥室腰石には左右に描かれた大きな翳と下方の大きな波と船で区画された空間に、馬と馬の手綱をとる武具に身を固めた人物、その上方にいななく一頭の馬と小さな船が配置され、右側の翳と馬の間には５色の三角文を意図したものが黒色と赤色で交互に塗られている（第２図１）。先に紹介したように金関氏はこれを「五旒」であると考定されている。五旒であっても「龍の衣服」以外にも考える余地はある。むしろ葬送儀礼に関係する点では、『荊楚歳時記』五月の条にある、

五彩の絲をもって臂に繫け、名づけて辟兵と曰う

に通じるものであり、五彩は「辟邪」を象徴するとの解釈も可能である。すると前述した五郎山の騎馬人物が保持する「もの」も「辟邪を象徴する」幟であり、次に述べる珍敷塚古墳で、船上に描かれたり、人物が手にもつ縦長の方形区画、鳥船塚古墳の船上に2本線で記された文様などは、死者の魂を擁護する道具だてと見なすことができよう。そのことはまたこの幟の存在により、「死者の魂」がここにあることを表示しているとも言える。具象的な像が少ないことから、この竹原古墳の絵画だけではその意味を汲み取ることはできないが、まずは「神聖な行為の一環として馬を船に乗せようとしている」情景を描いたものと推定できる。

珍敷塚古墳は福岡県浮羽郡吉井町の耳納山麓に広がる大古墳群のうちの1基で、1950年に土取工事により発見されたが、それにより破壊され、今日奥石と側石の一部を留めるにすぎない。奥石中央部に大きく靫を3個描き、その間に大きく伸びた蕨手文を配して、画面左端には大きな円文とその下方に船を漕ぐ人物と舳にとまる鳥、画面右端には飾りのついた幟をもつ人物と2匹の蟾蜍と小さな同心円文があり、末端部には岸に留まる鳥の構図になっている（第2図5）。この右端に描かれた鳥とするものはあるいは岸に立てられた衣笠かもしれない。2匹の蟾蜍の存在から右端の図像は月と想定され、中国的な観念の下に創作されたことが窺えることから、左端の円文は太陽の象徴と見ることができる。壁画中央に大きく描かれた靫と蕨手文は、画題が魂の浄化という神聖な状況であることを表現していると解釈され、全体として日月が宿る天空に死者の魂が運ばれる状況を読み取ることができよう。

鳥船塚古墳は珍敷塚古墳の南方300mに所在する古墳で、珍敷塚古墳と同様に破壊され、石室の一部のみが残されている。奥壁腰石の中央部に武装した人物と艪を漕ぐ人物があり、船の両端には鳥が、船の前方よりには箱形のものが描かれ、前方の鳥と箱、後方の鳥と人物との間には、2本線で表現された幟がはためいていて、死者の魂がここにあることと、死者の魂を護ることが意図されている。船の上方には円文が、左上方には2対の靫と太刀が、腰石上方の奥壁には1点の楯がそれぞれ配されていて（第2図4）、従来の辟邪思想の幾分かを留めている。船首の前方に2本の上下に交差する図像は、珍敷塚古墳と同様に黄泉の国（魂の永遠の休息地）の岸を表現したものとみることができる[3]。

これら4件の絵画に出現するモチーフとしては円文[4]、各種の武具、幟、船、鳥、馬、犬、人物を挙げることができる。日月星辰が死者の魂がたどり着く世界（天あるいは海の彼方）を象徴するものとすれば、これらの具象的絵画の内容は、「死者の魂が船に乗り鳥に先導されてあの世に行く」行程を描いたものと統一的に解釈することができよう。

こうした魂の担い手としての船や鳥の存在は、銅鐸の絵画や鳥取県角田遺跡出土土器に描かれた絵柄から弥生時代にまで遡る可能性については、国分直一（国分、1992）や金関恕（金関恕、1993）が力説するところであり、また最近荻原秀三郎氏によってこの問題は詳細に検討され（荻原、1996）、長江流域に展開した初期稲作民に淵源を辿りうる習俗であることが明らかにされている。『隋書』「倭国伝」の、

葬に及んで屍を船上に置き、陸地これを牽くに、或いは小車をもってす。

との記事を参照すると、弥生時代から古墳時代の日本では、葬送観念に「海上他界観」、「彼岸と此岸とを結ぶ船と鳥」のモチーフが存在していたことは確実であろう。

しかし竹原古墳にみられる玄武と朱雀、珍敷塚古墳の蟾蜍などの存在は、日本在来の思想の中には窺われないことから、金関丈夫が指摘するように、この時期、新たな大陸のイデオロギーがもたらされたことが推測され、装飾古墳に描かれた馬や騎馬人物、犬などの図像は新たな思想の導入を反映していると想定されるのである。

馬を描く装飾壁画

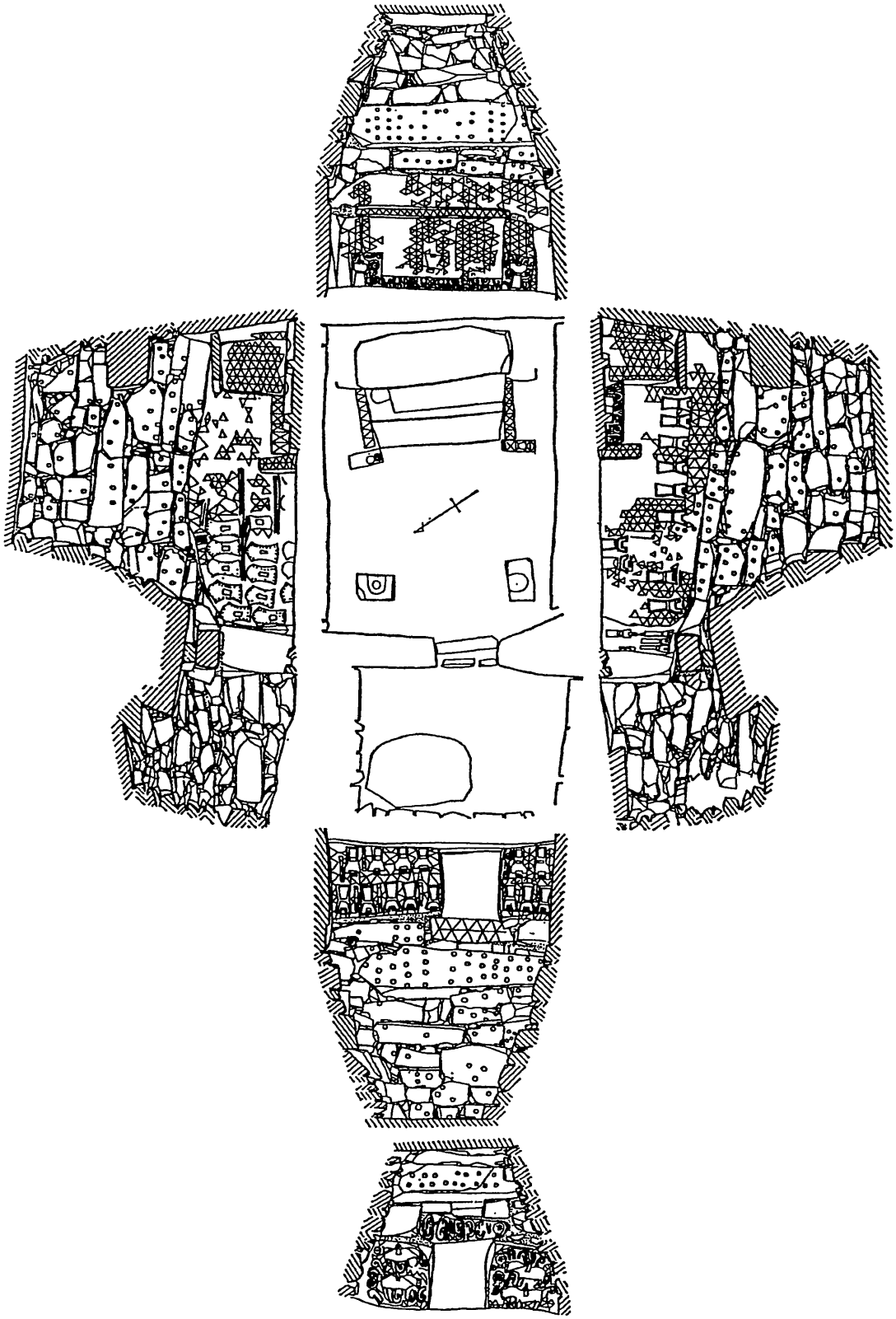
九州の装飾古墳の中で彩色により馬が描かれる事例としては、前述した五郎山古墳、竹原古墳を除くと次のような類例が知られている。

1	薬師下南古墳	福岡県久留米市草野町	騎馬
2	清澄橋古墳	福岡県浮羽郡田主丸町	馬
3	日ノ岡古墳	福岡県浮羽郡吉井町	馬
4	桂川王塚古墳	福岡県嘉穂郡桂川町	騎馬
5	田代太田古墳	佐賀県鳥栖市田代本町	騎馬
6	法恩寺３号墳	大分県日田市刃連町	騎馬
7	ガランドヤ２号墳	大分県日田市石井町	騎馬
8	永安寺東古墳	熊本県玉名市永安寺	馬
9	弁慶ケ穴古墳	熊本県山鹿市熊入町	馬

この他に福岡県浮羽郡吉井町原古墳にも船に乗る馬が描かれていたことが推測されている（金子、1974）。日下八光の模写では船に乗り、右側に頭を向けた馬が表現されているが、今日壁画の剥落が激しく、その当否は明らかにし難いために詳細は不明である（佐賀県立博物館、1973、吉井町教育委員会、1984）。また観音塚古墳の奥壁には数雙の船が描かれているが、そのうち右端にある図像を「船に乗った騎馬」とするには、不鮮明なことと、類例がないことから躊躇を覚える。

以上の古墳の中で年代的に最も遡上すると想定されるのは、日ノ岡古墳である。この古墳は全長が74mを測り、一重の周濠をもつ前方後円墳で、単室の胴張りのする横穴式構造の石室をなす。羨道部分が長大化する以前の短い類型に属し、６世紀の第二四半期の築造（磐井の乱後）と想定されている（石山、1992）。馬像は石室左側壁に三角文や円文に混じってわずかに一頭みられるだけであり、竹原古墳などにみられる明瞭な葬送のイメージには欠けている。

これに続き馬の登場する図像が描かれた、６世紀の第三四半期に比定される古墳として、桂川王塚古墳、田代太田古墳などを挙げることができるが、王塚古墳では馬は両側の前室奥壁に描かれたものであり（第３図）、死体を納める石屋形や石屋形を包む石室全体は三角文や円文、楯形文で埋め尽くされている。馬の持つ装飾的意味はこの他の装飾古墳にみられるものとは全く異なっていること、副葬品として多数の馬具や武具・武器を所有することなどから、むしろ



第３図　王塚古墳石室実測図

被葬者の生前においての「派遣軍の上官」としての誇らしい状況を物語るがごとき構図となっている。また田代太田古墳では人物や馬に乗った人物、船などが同一の空間に配置されていても、三角文や円文、楯形文などに挟まれて、明瞭な葬送のイデオロギーが認め難い構図となっている。薬師下南古墳では奥室左側の壁に、旗棹もつ騎馬が描かれていて、あるいは死者を象徴することも考えられるが、肝心な奥壁に装飾を欠くために、その意味は判然としない。清澄橋古墳では馬は単独に表現されることから、葬送儀礼との関連は定かではない。これらに対して馬が船や鳥などと結びついて明確な葬送儀礼を表現した事例は、これよりやや築造時期が遅れる古墳に認められる。

弁慶ケ穴古墳に見られるように、船と結びつく図像をもつものとして玉名市永安寺東古墳を挙げることができよう。この古墳では装飾文様として円文や三角文とともに船と馬が描かれるが、馬は1匹前室左側壁に、船3雙は前室右側壁にあり、両者が同一画面に意味ある組み合わせで登場することはない。永安寺東古墳は切石を使った石室構造の特徴から6世紀末に築造されたものと想定されることから、「葬送儀礼における馬のもつ意味を忘れかけた時期の壁画」とも解釈される余地もある。これに対して馬が船や鳥などと結びついて同一のシーンに現れ、明瞭な葬送儀礼を表現した事例としては、竹原古墳、五郎山古墳、弁慶ケ穴古墳などがあり、その時期を、6世紀の第三四半期から第四四半期の交、前後に築造されたものであるとさらに限定できる。

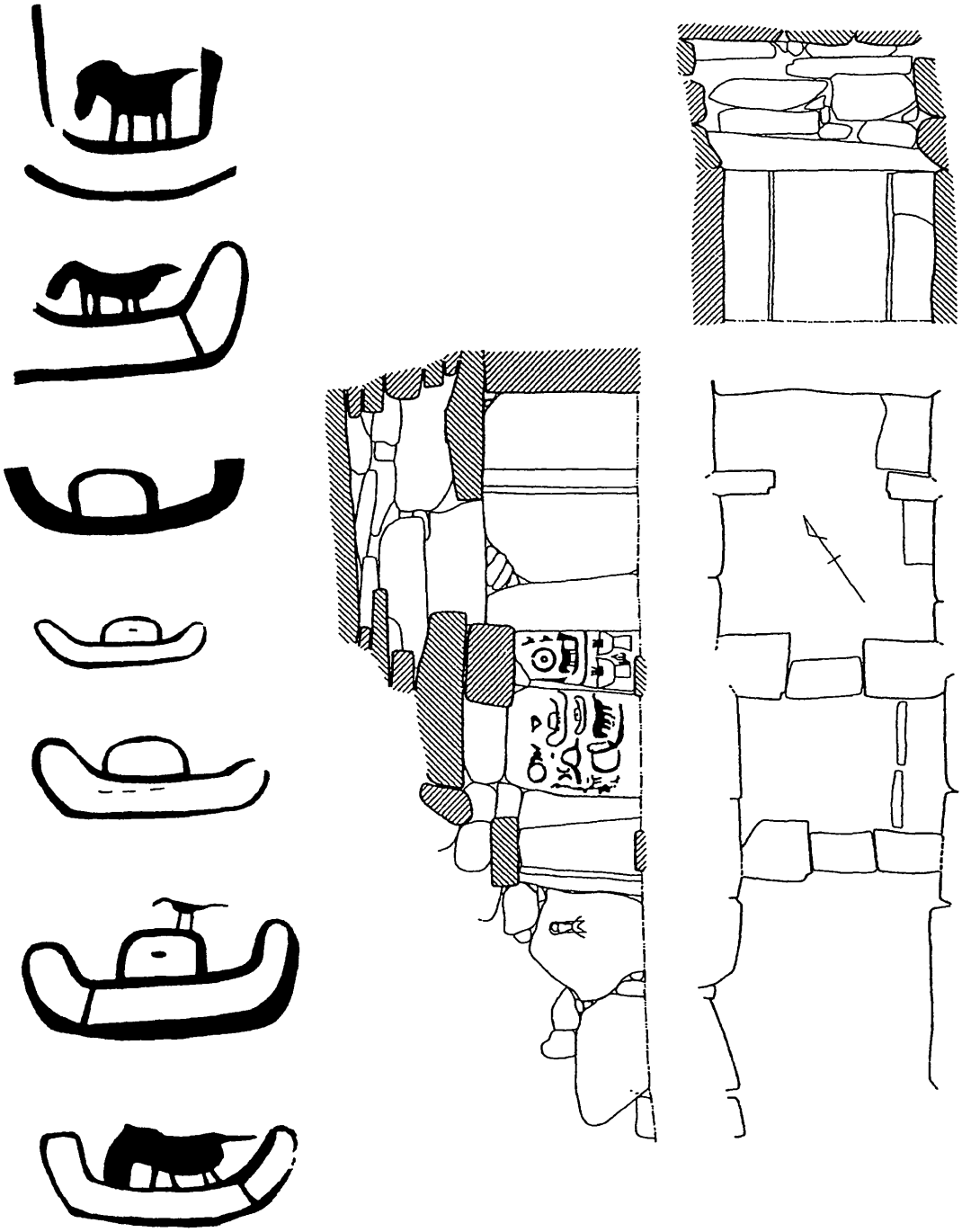
これら特殊な葬送儀礼を表現すると想定される装飾が施された古墳は、竹原古墳などの前方後円墳か、もしくは五郎山古墳や弁慶ケ穴古墳などその地域を代表する大型円墳であり、いずれも6世紀後半段階での古墳所在地域の特定有力者の墓と見なすことができる。 葬送儀礼に船が伴うことは、海上他界観をもつ集団に於いては通有の現象である（米田、1917）とすると、馬はどのように考えられるであろうか。これについて斎藤忠は「乗り主のいない馬は死者を運ぶものであり、死者を運ぶ船とともに、恐らく死者の霊魂を送るためのもの」と想定し（斎藤、1989)、白石太一郎は馬も船と同様に「魂の乗り物」であろうと指摘している（白石、1993)。弁慶ケ穴古墳に於いて、船上に馬が描かれる場面と船上に箱形の容れ物が認められる場面があり、箱形の容れ物の上に鳥がとまっていることから、この箱形の容れ物は棺であり、霊魂が存在していることを表示している。このように馬と棺が互換性をもつと理解されていることは、馬が棺と同様に魂を留めるものであったことを如実に示すものである（第4図)。

こうした「魂の運び手」として馬が重要な役割を担う事例は、古代の東北・北アジアに広く認めることができる。

『後漢書』「烏垣伝」には、

> 俗貴兵死、斂屍以棺、有哭之哀、至葬則歌踊相送。肥養一犬以彩縷牽、併取死者所乗馬衣物、皆焼而送之。言以属犬、使護死者霊帰赤山。赤山在遼東東北数千里、如中国人死者魂帰岱山也。

とあり、鮮卑族などにもこうした観念が強く見受けられ、また扶餘族の墓に比定される老河



第４図　弁慶ケ穴古墳石室実測図と装飾モチーフ

深遺跡でも多数の馬の随葬墓が発掘されている（吉林省文物考古研究所、1987)。さらに百済の王墓である石村洞古墳でも馬の随葬が認められることは、こうした馬にまつわる葬送観念が少なくとも朝鮮南部（百済）にもあったことが窺えよう。

伽耶をめぐる情勢

弁慶ケ穴古墳などに描かれた装飾モチーフが、「馬の背に乗って死者の魂があの世に行く」という考えの反映であるとすると、古墳の年代観からそうした観念は極めて限られた時間帯の中で出現したことがわかる。また極めて短期間のうちに、しかも点在的にこうした葬送観念が受容されるという現象は、ただ単に「文化伝播」では解釈し難いことを示している。従来こうした装飾古墳の出現に関して、「朝鮮出兵」に関連して説かれることが多かった[5]（森、1983、佐田、1991)。そこでここでは5世紀末から6世紀段階での九州地域の特定有力者が、大陸の新しい思想と身近に接する機会として、『日本書紀』に拠り当時の出兵関連記事を取り上げてみよう。

○雄略二十三年四月（479）

仍りて兵器を賜ひ、併せて筑紫国軍士五百人を遣して、国に護り送らしむ。是を東城王とす。是歳、百済の調貢、常の例より益れり。筑紫の安致臣・馬飼臣等、船帥を率ゐて高麗を撃つ。

○継体九年二月（515年）

仍りて勅して、物部連を副へて、遣罷帰す。（中略）故、物部連、舟師五百を率て、直に帯沙江に詣る。

○宣化二年十月（537）

大伴金村連に詔して、其の子磐と狭手彦を遣して、任那を助けしむ。是の時に、磐、筑紫に留りて、其の国の政を執りて、三韓に備ふ。狭手彦、往きて任那を鎮め、加、百済を救ふ。

○欽明九年十月（548）

三百七十人を百済に遣して、城を得爾辛に助け築かしむ。

○欽明十一年（550）

百済本記に云はく、三月十二日辛酉に、日本使人阿比多、三つの舟を率て、都下に来り至るという。

○欽明十四年六月（553）

内臣を遣して、百済に使せしむ。仍りて良馬二匹・同船二雙・弓五十張・箭五十具を賜ふ。

○欽明十五年五月（554）

内臣、舟師を率て百済に詣る。

○欽明十五年十二月（554）

有至臣が将て来る所の民、竹斯物部莫奇委沙河、能く箭を射る。

速に竹斯嶋の上の諸の軍士を遣して、臣が国を来り助けたまへ。

能く射る人、筑紫国造といふものあり。進みて弓を彎き、占擬ひて新羅の騎卒の最も勇み壮れる者を射落す。(中略) 余昌、国造の圍める軍を射却けしことを讃めて、尊びて名けて鞍橋君と曰ふ。

○欽明十七年正月 (556)

是に、阿部臣・佐伯連・播磨直を遣して、筑紫国の舟師を率て、衛り送りて国に至らしむ。別に筑紫火君を遣して、勇士一千を率て、衛りて弥弖に送らしむ。

この他に、その後の敏達十二年十二月の条にある日羅に関する記事から、宣化二年の渡韓の一員に葦北の国造の刑部の靫負阿利斯登がいたことが知られる。

これら記事に述べられる「筑紫の軍士」、「筑紫の安致臣・馬飼臣等、船師を率ゐて」、「竹斯物部莫奇沙河」、「筑紫国造鞍橋君」、「筑紫国の舟師」、「筑紫火君」、「葦北国造刑部の靫負阿利斯登」などは、百済から要請されたという「竹斯嶋の上の諸の軍士」の実態を表すものであり、5世紀末から6世紀にかけての朝鮮への出兵記事では、軍の船団を組むことができる九州の国造クラスの人物が大きく関わっていたこと、しかもそれが550年から56年の伽耶の滅亡時期に集中することが窺われる。彼らは岸俊男のいう九州の「国造軍」と言うべき存在であり (岸、1966)、それに靫負や部民が加わった集団であったことが推測できる (山尾、1986)。吉田晶による九州の氏族一覧を手掛かりにすると (吉田、1975)、法恩寺古墳やガランドヤ古墳が所在する日田に日下部が分布していることが注目され、国造軍の一員として、これら古墳の被葬者が参画した可能性が高いことを表している。

また「勇士一千人を率いた」筑紫火君についての『日本書紀』の記事には、『百済本記』を引き、「筑紫君児、火中君弟」と解釈が難しい注が施されているが、この「中」は可能性として菊池川流域に所在すると一般には考定されている[6] (1986)。この「中」が熊本県玉名市大字中に比定しうるとすれば[7]、「火の中の君の兄」が居住する菊池川流域に展開する、6世紀後半段階に築造された比較的大きな円墳などの被葬者たちもの一部も、筑紫君に率いられた「勇士一千人」の中に含まれ、国造軍の中核として出兵したことは容易に想像でき、熊本県山鹿市小原浦田、長岩、鍋田などの馬像を浮彫りした横穴に埋葬された人々は、それらの従者であったことを想定することも可能であろう[8]。

このように見て来ると、九州に出現した6世紀代の馬を装飾にもつ古墳の被葬者たちは、殆どがこの欽明期の朝鮮派兵に関連した集団に属していた可能性は極めて高いと想定される。

馬を描く装飾古墳の被葬者

この欽明期における朝鮮派兵は百済の要請に応えたもので、大きくは百済の対高句麗との戦闘と対新羅との戦闘の2段階に分けることができる。

百済は高句麗の圧迫を受けて475年熊津に遷都したが、その後も高句麗の南下は続き、まず

新羅と結ぶことでこの局面に対処する一方、伽耶地域をその領土に組み込むことで、勢力の拡大を図ったのである。その結果「任那」の割譲を得るとともに、聖明王二六年（548）以降、百済は高句麗との戦いに勝ち、漢江流域の旧6郡を回復した。『日本書紀』欽明二三年（562）の条に引く大伴狭手彦の活動、

遂に勝に乗りて宮に入りて、盡に珍寶眺賂・七織帳・鐵屋を得て還来り。

は、欽明十一年（550）に関連した記事と考定されることから、対高句麗との戦闘は派遣軍にとって有利に展開したことが窺え、国造軍の一員として参戦した九州の豪族にとってもそれは同様であったと予想される。ところが新羅真興王十二年（551）漢江流域の百済の旧領が新羅の手に帰し、高句麗との直接の対決が回避される状況になると、百済と新羅の対立が顕在化し、真興王十四年（553）以後は百済と新羅の間での戦闘が持続的に行われる事態に陥った。こうした点から欽明十五年以降の派兵は、伽耶を巡る新羅との戦いでの百済支援のための参戦であった。しかし『三国史記』「新羅本紀」真興王十五年（554）の条、

百済明礼、加良と興に来って管山城を攻む。（中略）新州の軍主金武力、州兵を以之に赴き、戦いを交ゆるに及んで、裨将三年山郡の高干刀、急に撃って百済王を殺す。是に於いて諸軍勝に乗じて大いに之に克ち、佐平四人、卒二万九千六百人を斬る。匹馬返る者無し。

の記事や、同年の『三国史記』「百済本紀」聖王三二年の条の

秋七月、王新羅を襲わんと欲し、親ら歩騎五千を師い、夜狗川に至る。新羅の伏兵発し、興に戦って乱兵の害する所と為りて薨ず。

記録は、百済聖明王の親征にもかかわらず、王自身が殺されるという大敗北を喫したことを述べ、これに続き、さらに「百済本紀」威徳王八年（561）の条の、

兵を遣して新羅の辺境を侵掠す。羅兵出て撃ち之を敗り、死する者一千余人。

などの内容から、伽耶を巡る新羅との戦いが圧倒的に新羅優位のままに推移したことを知ることができる。また『日本書紀』欽明二三年（562）の条の、

春正月、新羅任那の官家を打ち滅しつ。

と「任那」の滅亡記事は、百済ばかりでなく、百済を支援した日本側の完全な負け戦であったことを物語る。このことから、これらの欽明期の朝鮮での戦闘に加わった国造軍の置かれた状況は、欽明十二年（551）を境としてその前後では大きく異なった局面が展開したことが窺える。

王塚古墳やチブサン古墳を始めとする6世紀中頃以前に築造された装飾古墳には、馬と葬送儀礼の結びつきが明白には表現されていない。古墳築造の経緯と時期から、6世紀50年代後半から60年代はじめにかけての伽耶の滅亡時に朝鮮に送り出され、悲惨な体験をした集団に関係する人物こそが、彼の地に展開していた新しい葬送儀礼を導入し、「馬」を魂の担い手として描いた古墳の被葬者であったと推定できよう。

おわりに

葬送儀礼の明瞭な表現としての馬が装飾壁画に登場するのは、6世紀の第三四半期から、第四四半期の交、前後と極めて限られた時期であった。それは国造軍の一員として欽明期に朝鮮に派遣された集団がもち帰った大陸地域に展開する新しい思想と類推でき、これら装飾古墳はその新しい葬送儀礼の思想の下に営まれた墓であろうと想定してきた[9]。そこに表現された馬は「魂の乗り物」であり、それは中国北方地域で典型的にみられる葬送観念であった。ところが北・東北アジアでは死者の霊魂は、「犬に先導されて、馬に乗り」魂の故郷（天界）へ向かうのであり、日本の装飾古墳では五郎山古墳の壁画を除いては葬送儀礼と結びついて犬が登場することはない。弥生時代からの伝統である「魂は船に乗り、海＝天の彼方に向かう」という観念が強く受け継がれ、当時の九州に於いては魂と船との結びつきから離脱することはできなかったのである。したがって6世紀後半段階の装飾古墳に描かれたライト・モチーフは、弁慶ケ穴古墳や竹原古墳、五郎山古墳の壁画から想定されるように、「死者の魂が乗った馬を船に乗せて、鳥に先導されてあの世に送る」という新旧の思想を折衷した観念の下に表現されたとみることができる。

しかし6世紀第四四半期以降、九州在住者にとって朝鮮と切実に関係する契機がなくなると、その後に築造された装飾古墳の絵画の中から馬のモチーフは喪失し、有明海一帯の石室の中に船を線刻することが再び盛んとなり、菊池川流域の横穴群にゴンドラを表示することが隆盛することとなる。したがって船像と結びついた魂の運び手としての馬像の登場は、ほんの限られた一時期の現象に過ぎなかったといえよう。

装飾古墳に描かれた壁画の中での葬送儀礼と結びついた馬の出現時期は、上述のように極めて短い、限られた時間帯に過ぎなかったが、それだけに海外に戦闘要員として動員され、伽耶の滅亡に併せて敗走を重ねる戦局において、死に直面した状況に置かれた集団の間でのそれは永く留めるべき鎮魂歌でもあったのであろう。

本稿の基本的な考えは、1981年から3ヶ年間熊本県教育委員会の高木正文氏と共同で、菊池川流域の横穴群の実測調査を行った期間中生まれた。その後1993年秋の、国立歴史民俗博物館主催「装飾古墳特別展示」で日下八光氏の装飾古墳の模写に接したこと、1996年冬に福岡大学が調査した五郎山古墳を見学したことにより、全体の構想をまとめることができた。

注

（1） さらに言うならば葬送儀礼に係わる品目においては、死体の「容れ物」としての「棺」が最も重要視されなければならないのであり、それ故に古墳装飾は棺に「辟邪」の文様が施されることから出発し、石棺や石棺の容量を拡大した石障が東部瀬戸内や畿内地方などの遠方にわざわざ運ばれるという現象が生じるのである。

（2） 福井県小山谷古墳出土の舟形石棺の上蓋に表現された「鏡」などはその走りである。

（3） これら4件の装飾絵画は、見方によっては、同一工人の手になり、同一集団に受容されたものであり、喪屋から黄泉までの一連のモチーフが表現されているとも解釈される。

（4） 円文は4・5世紀ころの鏡の図像から展開したことが想定できる。鏡が日月と同一視され、時には辟邪を表し、天や神を象徴するものであることは、東北アジアから北アジア各地にみられるシャーマンの伝承で窺うことができるし、『日本書紀』の大日霊尊や月弓尊の誕生説話、『古事記』の天照御神、月読神の出現時の話に認めることができる（甲元眞之「鏡」金関恕・佐原真編『弥生文化の研究』第8巻、雄山閣出版、1987年参照）。

（5） 装飾絵画の出現と朝鮮派兵を結びつける考え方は、多くの論者が既に指摘していることである。小林行雄氏は「もし想像をたくましくすることが許されるならば、むしろ任那遠征の体験を表現したものとみる」として、葬送儀礼とは関連させないで、朝鮮派兵と結びつけている。小林行雄（1964）参照。

（6） 八木充氏は1997年6月九州考古学会主催「シンポジウム　筑紫火君の謎をさぐる」で同様の見解を披瀝された。

（7） 現在の玉名高校の敷地付近の字が「中」である（松本寿三郎先生の御教示による）。角川書店の『日本地名大辞典』や平凡社の『熊本県の地名』によると、建武二年（1355）の菊池武吉の寄進状、貞和五年（1349）の壱岐守輔重寄進状、応安八年（1357）近江守平　某寄進状などに中村の地名があり、中村の地名が中世まで遡上することは確実である。菊地武吉の寄進状に付された坪付写に掲げられた坪名のうち三坪が、今日の玉名市大字中周辺で確認されていることから、この一帯が中世に中村と呼称されていたことが知られる。大字中は菊池川河口の洪積台地上にあり、台地下の現ＪＲ玉名駅付近で湊の遺構が発見され、台地上の北側に隣接して、律令時代の玉名郡衙関係遺跡（郡倉、郡寺、郡庁）が集中していることが発掘の結果判明している。6世紀段階の国造の居住地が後に郡衙の所在地になり、国造クラスが後に郡司に編成替えされる例が多いことからも、この比定の確実性を高めていると言えよう。また付近は「田」字を記した木製鎧が出土した柳町古墳時代集落遺跡や、5世紀広範の首長墓である稲荷山古墳や伝左山古墳が、さらにここから東北に2キロほど離れた所に、大坊古墳、永安寺東古墳、同西古墳、馬出古墳などの装飾古墳が所在し、台地の東を流れる繁根川上流域の石貫に穴観音、ナギノ、古城などの装飾をもつ横穴群が多数見られることもその裏付けとなろう。今日の玉名市の中心部は律令時代には玉名郡日置郷に比定されること、菊水町出土の火葬骨壷に伴う墓誌の銅板により、玉名郡の「権擬小領」として日置氏の名が窺われることなどは、以上の考定の否定資料になる可能性がある。しかしこの点に関しては、日置部と火のカバネは「キミ」であり、同一国内で国造とカバネを同じくし、ウジ名の異なる部＋カバネのウジが分布する辺境の地域では、「国造の一族が部民を管掌した結果生じたとするのが妥当であろう」との八木充氏の指摘が参考になる。八木充「国造制の構造」岩波講座『日本歴史』第2巻、1975年参照。

（8） この時期菊池川中流域の横穴墓に、五弦（伽耶）琴を弾いたり、太鼓や鼓を鳴らすなど従来この地域では見られなかった図像が表現されていることも、新しい葬送儀礼の登場を物語る。高木正文「横穴墓に刻まれた鎮魂の調べと涙」『交流の考古学』1991年、参照。なおこうした新しい

観念が日本に導入される契機の１つとして、朝鮮に派遣された人々が、百済や伽耶での実際の葬儀を目の当たりにした可能性も考えられる。

引用文献

日本語

赤崎敏男　1995「筑後の装飾古墳」『考古学ジャーナル』第395号

荻原秀三郎　1996『稲と鳥と太陽の道』大修館書店

乙益重隆　1974『装飾古墳と文様』古代史発掘第８巻、講談社

金関恕　1993「古代文学と考古学」『古代文学とは何か』勉誠社

金関丈夫　1969「竹原古墳奥室の壁画」『MUSEUM』第215号

金子文夫　1974「考古遺跡」『吉井町誌』

岸俊男　1966「防人考」『日本古代政治史研究』塙書房

蔵冨士寛　1997「石屋形考」『先史学・考古学論究』２、龍田考古会

国分直一　1992「基層文化の系譜」『日本文化の古層』第一書房

国立歴史民俗博物館　1993『装飾古墳の世界』

小林行雄　1964『装飾古墳』平凡社

斎藤忠　1973『装飾古墳』講談社

　　1989『壁画古墳の系譜』学生社

佐賀県立博物館　1974『装飾古墳の壁画』

白川静　1970『詩経』中公新書

白石太一郎　「古墳壁画の解釈学」『装飾古墳の世界』国立歴史民俗博物館

曽布川寛　1981『崑崙への昇仙』中公新書

高木恭二　1994「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮崎クリアイト』第６号

高木正文　1984『熊本県装飾古墳総合調査報告』熊本県教育委員会

坪井清足・町田章　1977『壁画・石造物』日本原始美術大系第４巻、講談社

藤井功・石山勲　1979『装飾古墳』原始美術第10巻、講談社

松本信広　1954「古代伝承に表れた車と船」『日本民俗学』第４号

森貞次郎　1964「竹原古墳」小林行雄編『装飾古墳』平凡社

　　1983「装飾古墳の発生と展開」『九州の古代文化』六興出版

山尾幸久　1986「文献からみた磐井の乱」『日本古代国家の形成』大和書房

吉田晶　1975「古代国家の形成」『岩波講座日本歴史』第２巻、岩波書店

米田庄太郎　1917「天鳥船」『芸文』第８巻２・３号

中国語

吉林省文物考古研究所　1987『楡樹老河深』文物出版社

挿図の出典

第１図　蔵冨士寛作成

第２図　森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」、「装飾古墳の発生と展開」『九州の古代文化』六興出版、1983年、森貞次郎「鳥船塚古墳」小林行雄編『装飾古墳』平凡社、1964年。

第３図　森貞次郎「装飾古墳の発生と展開」『九州の古代文化』六興出版、1983年。

第４図　高木正文編『熊本県の装飾古墳』熊本県教育委員会、1984年。

『熊本大学文学部論叢』第61号、1998年

山尾幸久先生は『筑紫君磐井の戦争』新日本出版社（1999年）の中で、筑紫火君の本拠地は山鹿市の「中」であろうと指摘され、また親友高木恭二さんは山鹿市中の中村双子塚がその墳墓ではないかとの教授をえた。中村双子塚はその後山鹿市教育委員会により、後円部の発掘が行われ、石屋形を内部主体とする６世紀中頃の古墳であることが判明した。『中』を玉名市のそれにあてたのは惣卒にすぎた。